

# 「神」になった空海

——その思想と生涯より——

藤 間 日 奈 子

はじめに

空海という名を聞いて思い浮かべるのはなんだろうか。では、弘法大師と聞いて思い浮かべるのは。空海と聞くと「歴史上の人物」を想像するのに、弘法大師と聞くと、なぜか実際に存在した人物として思い浮かべることができない、ということはないか。

真言宗の布教に尽力した人間、空海。人の身に余るほどの伝説を纏って、大きな存在となつてしまった弘法大師。では、どのようにして「空海」は「弘法大師」となったのか。その要因を空海という人物の中に見出だしていきたい。

空海

空海が遺したものはとても多い。特に目立つのは、やはりその優れた著作の数々だろうか。当時には珍しい、文章論や詩作論を語る『文鏡秘府論』や、日本初の書体辞典である『篆隸万象名義』なども著しており、文学への造詣の深さを感じさせるものも多数存在する。とはいえ、やはり宗教論を説くものが多く、興味がなければめったなことでは触れないような作品のほうが多いだろう。

その中でも注目したいのが、『三教指帰』である。若き空海の宗教観も文学作品への姿勢も読み取れる、彼の処女作だ。

七七四年に讃岐国で生まれた空海は、一五歳ごろには大学で漢籍を学んでいたが、そのうち、ある沙門から「虚空藏求聞持法」という修法を授けられた。それがきっかけとなり、仏教の道にめざめた空海は大学を辞め、私度僧として修行にはげむこととなる。そして二四歳の時に、この『三教指帰』を著して、仏教を選び取る決意を示した。ここまでは、空海本人が『三教指帰』の序の中で語っている。また、同じく序の中で、「人に見せるためのものではなくて、自分の気持ちを書きとめただけ」というようなことを書いているが、それらを見ると、この作品は彼自身を振り返り、自らの思いを整理するためのものだったことが感じ取れる。

しかしこのような決意表明文、しかも二四歳のときに仕上げたものと考えると、この作品はあまりに出来過ぎていというほど完成されている。実は二四歳の時に書かれたのは『三教指帰』というもので、『三教指帰』としてまとめられたのは空海三一歳のときのことだったという有力な説もあるが、そうはいつでもこの作品の草稿を二四歳の時点で書いたというのが事実であれば、やはり常人の域

を超えている。四六駢儷体を用いて書かれた『三教指帰』は、ただ漢籍古典籍を学んだだけでは到底できないだろうと思われるほど、様々な文学作品からの引用も多く、美麗な文章で彩られている。そのうえ、物語は論理的でありながらドラマティックだ。

序から始まり上・中・下巻という構成で話は進み、まず上巻では亀毛先生という儒教の先生の独壇場。次に中巻では道教の虚亡隠士、最後に下巻で仏教の仮名乞児が、というように、それぞれの教義を次々と語っていく戯曲形式で話は進む。ならずものの代表として蛭牙公子という登場人物を立て、そこにやってきた亀毛先生が立身出世を目指すべしと儒教を説き、今度は世を捨て永く生きるべしと、虚亡隠士が道教を説く。最後に現れるのが仮名乞児で、自分のための儒教や道教よりも、己のみならず大衆も救うことのできる仏教が最も優れていると説き、皆を帰依させるに至るのだ。

この一作品を読んだだけでも、空海が優れた文筆家であったことは感じ取れるだろう。ただ教義を聞くだけではつまらないと感じる人々であっても、読みやすいと思えるものを書くのは難しいことだ。また、その直筆の文字を見れば、なんと美しいこと。嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆に数えられ、手足口に筆を持って書を書き上げたとして「五筆和尚」と異名をとるほど、空海の書の腕は素晴らしいものだったのである。

そういった彼の才能は、真言宗伝播のための活動のうえで、大きな助けともなった。

空海三十一歳のとき、遣唐使として仏教の本場唐に行く絶好の機会が訪れる。急遽、留学僧として遣唐使船に乗れるようにと準備をして向かった唐において、空海は青竜時の恵果和尚との出会いを果た

した。恵果和尚は師に不空三蔵を持ち、この不空三蔵は、師に密教の開祖である善無畏三蔵や金剛智三蔵を持つ、正統な密教の後継者であった。そんな恵果和尚につき、空海は甕の水を移すがごとく密教の秘法を吸収し、ついには金剛界・胎藏界両部の灌頂を受けるに至ったのだ。仏の世界を表す金剛界と、現世を表す胎藏界と、両界の奥義を修得するのは、長く修行を積んだ者でも難しいところを、空海はたったの二年でやってのけたのである。彼の筆の巧みや教義の高さはここでも発揮され、唐の人々を唸らせたという。彼が恵果和尚の元々の弟子たちを追い抜いて、密教の正統な後継者となったのには、こういった地盤があったことも一つの要因だろう。

もし、もう一つ要因を挙げるとすれば、空海の用意周到さだろう。彼は、まったく密教を知らない状態で、唐に入ったのではない。もちろん、ある程度勉強を重ねたうえで、密教を修得するために入唐したのである。

彼が初めて出会った仏教の修法は、「虚空蔵求聞持法」という、この求聞持法を百万回唱えれば、たちまち記憶力がよくなりどんなことでも覚えられるというものだった。虚空蔵求聞持法は、宇宙のように広大な知識を持つといわれる虚空蔵菩薩の力を借りようとするものだが、この虚空蔵菩薩は密教の中でも重要な存在として扱われている。不空の訳で伝わっている虚空蔵菩薩に関する經典の存在や、曼荼羅の中で、あるひとつの世界を任されている虚空蔵菩薩の姿をみると、それは明らかである。

また、空海は入唐以前に密教のなかでも最重要經典に数えられる「大日経」との出会いも果たしていたと考えられる。弟子たちにむけて書いた『御遺告』のなかでは、唐へ行く以前に、ある日夢に現

れた仏の導きで大日経と出会ったという記述もあるようだ。

これらのことを考えると、空海は始めから密教と触れ合い、密教を学ぶ目的で入唐した可能性が高い。空海の二年という非常に短い滞在中、その中で密教の奥義を修得してみせた事実を考えると、やはり事前に入念な準備をしていたと考えるのが妥当である。

そして密教の全てを携えてついに帰国ということになるが、このときばかりはそううまくはいかなかった。もともと二〇年の契約だったところを無視して、二年での帰国である。さすがに朝廷も、易々と帰京を許しはしない。そこで空海が朝廷に送ったのが「御請来目録」である。ここには、空海が密教の正統な後継者となったいきさつと、持ち帰った経典・法具の目録が記されていた。

この功績が認められたこともあって、空海は京に入り、ここから真言宗布教のための活動が始まるのである。

その後空海は、結果的に、嵯峨天皇というパトロンを付けることになった。元々芸術に造詣の深かった嵯峨天皇は、空海の文筆家としての面をいたく気に入っていたようで、自分の作品について意見を求めるようなこともあったという。世界的にも認められる空海の才能を放ってはおけなかったのだろう。

また、嵯峨天皇は、空海のそういった面のみではなく、宗教家としても厚い信頼を寄せていたようだ。嵯峨天皇が即位した直後に起こった菓子の変。これは平城上皇と嵯峨天皇、台頭してきた藤原家との間での権力争いであるが、それと同時に天災にも遭っており、当時は京がたいへん乱れた時期でもあった。菓子の変が収束して最高権力者として改めて国を治めようと考えた時に、嵯峨天皇が利用したのが宗教の力だったのだ。鎮護国家を形成したいという嵯峨天

皇の意志にそって、空海は鎮護国家のための修法を数々行うことになる。それが見事成功をおさめ、さらに嵯峨天皇の信頼も厚くなるといった形で、空海は徐々に勢力を広げていくのであった。宮中に真言宗を浸透させるきっかけを作ると、空海は国の中枢から真言宗を広める働きを進めていく。雨乞いや鎮護国家の修法を行い、嵯峨天皇の許しを得て各所に真言道場を設け、人々に向けての布教を進めるとともに、四人もの天皇・上皇に灌頂を授けたのだ。まずは宮中での信頼を得て、後に民衆に対して開かれた場所を提供するという手法で真言宗伝播に努めたのである。

そういった事業に限らず、唐で学んだ知識や経験を活かして様々な社会事業にも着手した。有名なところで言えば、満濃池の改修工事や綜芸種智院の創設などがある。治水が難しく誰も手の付けられなかった満濃池を、唐仕込みの技術で見事改修してみせ、学校を貴族のためでなく民衆のためにと綜芸種智院を創設した空海の姿は、人々の目にどのように映ったことだろう。

雨を降らせ、国を治め、民衆にも優しく、たいそう芸術家でもある。どんな人の目にも空海は超人として映ったのではないか。身分の壁を越えて、彼の存在は、人々の心に深く刻まれたと考えられるのである。

では、その空海の思想とはいったいどういうものだったのか。空海の思想の中に一貫してあるのが、すべてのものの中に大日如来が存在するという考え方である。これは最も高位の存在を大日如来として、どんなものも大日如来が変化した姿であると考えるものだ。もともと仏教は、仏陀の存在とその言葉を拠り所にするものだった

が、仏陀の教えを厳守する動きの上座部仏教と、それに対して仏教をもっと開けたものにしてしようとする大乘仏教とに分かれていった。密教はその中でも大乘仏教から派生してできたもので、仏陀の言葉の奥に潜む真理を、文字を使い、体を使い求めていこうと働きかけるものである。密教に対してほかの宗派が顕教と言われるのは、經典など目に見えて存在するものから真理を得ようとするからであり、密教は經典研究のみならず、秘密の儀式や各種修法の実践をする。そういった部分は、口伝や儀式を通して師から弟子へと受け継がれていく師資相承のものである。

実に閉鎖的に思えるかもしれないが、密教の考え方を知ると、密教の世界の広さを感じるができる。この世のものは森羅万象、大日如来の姿の変化したものであるし、どんな神もいずれは大日如来に行きつくということで、密教の世界は人も神も包括してどんなん広がついていくというのだ。両界曼荼羅は有名だが、金剛界はそういった仏の世界を、胎藏界は衆生の生きるこの世を図式化したものなのである。

日本においては、奈良時代に密教が始まっている。しかしその頃は、日本にやってくる密教經典をどのように読み解くかという學術研究の側面が大きかった。その時点では、日本の密教はまだ密教といえるほど、顕教との明確な区別が付けられていなかったことだろう。そこに空海がまるごと持ち込んだのが「真言宗」という密教教義を掲げる宗派である。密教の經典仏具を携え、その奥義も身に付けた空海の存在によって、日本密教は大きな一歩を踏み出したのだ。

ここまで見てきたように、空海は密教というものを丸ごと体系化して日本に持ち込んだわけだが、彼のまとめた密教には大きな三つ

の特徴がある。それが「法身說法」「可分課説」「即身成仏」である。「法身說法」とは、宇宙の真理であるとされる「法身」自らが教えを授けてくれているという考え方だ。法身とは仏教の三位一体のうちの一つであり、その三位一体は「応身（人々の前に真理が現れるときの姿）」「報身（修行をして成仏しようとする姿）」「法身（宇宙の真理や物事の本質）」の三つの姿で形作られる。

「課分可説」とは、物事の結果（課分）は説明することができるといふものだ。このとき「課分」とは、仏教徒の目指すところである悟りのことを言う。もともと「悟り」というのは目に見えないものであるのだ、たとえば仏陀が悟りに至るまでにどのような苦難を乗り越えたかということとは説明できても、悟るとはどういうことかまで言葉で説明することはできないというのがそれまでの仏教考えだ。ところが密教ではそれが可能であるというのである。師資相伝の教え、儀式、またヨガや呼吸法などを通して課分を教えることができる」と空海は説いた。

そして「即身成仏」とは、読んで字のごとく、この現世においてかならず成仏することができるというものだ。幾度も輪廻を重ねてようやく悟りに至り、仏となると説いてきた他の仏教にしてみれば脅威の説であったことだろう。この根底には、この世の森羅万象すべてに大日如来が内在するという考え方が存在している。人も、動物も、虫も、道端に転がる石ころにさえ、大日如来が存在している。そのことに気付くことができれば、自らにも大日如来様がいらっしゃるのだから、かならず成仏できるといふ理論である。

注目したいのは、この「即身成仏」の考え方が、当時の女性たちを救うことになったということだ。女性たちは当時、女は「不浄」

であるために、悟りに至るのが難しいという固定観念に縛られていた。ところがこの密教の考えによると、全てのものに大日如来が存在するのだから女性であっても悟りに至れる、仏になれるというのである。この思想は、あらゆる人々のとって救いの手となり、数多くの人を勇気づけたことだろう。

このように、空海によってまとめられ、持ち込まれた密教とは、実に肯定的で包容力のある仏教だったのである。

### 弘法大師

空海が弘法大師となったのは、入定後八十六年もたつてからのことだった。八五三年に高野山にて見事入定を果たし、即身仏となったといわれる空海だが、すぐに偉大な「大師」号が贈られたわけではない。弟子たちの再三の要請によって、ついに醍醐天皇より「弘法大師」と諡が与えられるはこびとなった。そしてこの弘法大師という名に、様々な伝説が付き纏うようになるのである。

前述した、弘法大師の入定というのもその伝説のひとつだ。入定とは、永遠の定にはいることであり、定というのは冥想の世界に入つて宇宙と一体化するというのである。つまり、弘法大師は肉体を持った仏として、現在もこの世に存在するという他にない。入定したという弘法大師の衣替えの儀式の折、身に付けていた衣の裾が土で汚れていたというエピソード等に裏付けられて、弘法大師は人々を救うためにいまだ歩き回っているという伝説が生きているのである。

弘法大師自身、つまり空海という人間に対して語られる伝説は他にも存在し、彼の本地が大日如来であるとしようなものもある。

また、前身、前世の姿として不空や聖徳太子が挙げられており、後身に空海入定後に高野山発展に尽力した僧侶が挙げられることもある。例えば不空の命日に誕生したので空海は不空の生まれ変わりであるとするように、もちろんそれぞれに理由はあるけれども、このあたりの伝説に関しては、真言宗側の後付けと考えるのがふさわしい。

彼の入定後には有力な僧はなかなか出てこなかったこともあり、真言宗にとつてあまりに偉大な存在である空海を高めていくことで、真言宗の権威づけを図ったのであろう。

こういった伝説は、真言宗の求めた空海に対する付加価値として理解できるが、とてもそうは思えない伝説も、弘法大師には数多く存在する。

水や植物に関する伝説はその最たるもので、村に現れた僧形のもので、その土地の良し悪しが決まるという定型がある。親切にすれば、不毛の土地に杖を一突きしただけで水が湧き、良い植物がどんどん成長する。もし親切にしなれば、水はとても飲めないようなものになり、ろくな作物がとれなくなる。このような伝説が各所に残っているのだ。また水に関しては山の湧き水に大師の名がつくものや、弘法大師の杖の一突きによって出来上がったといういわれのある水源も多い。

そのほかに、「大師講」にまつわる伝説もある。一月の下旬に、「大師講」という祭りがとくに東日本などで見られた。その祭りの日には大師様が人々の家を回つてくださるといふように信じられていた。一月の二三日には「でんば雪」が降ると言われていて、これは大師様が、大師講の夜、自分をもてなすために盗みまで働こう

とした足指のない老婆の足跡を隠すために降らせた雪だという。また、そうではなくて大師本人自身が足指のない「でんぼ」、もしくは片足のない不具者であつて、その足跡を隠すために雪を降らせたのだという説もある。

これらの伝説は「空海」という人と結びつけては考えづらい。本当ならば弘法大師その人とは関係ないのであろう、民間伝承の中に残る人智を超えた何かが、弘法大師という姿を借りているようにしか思えないものだ。しかしそれでも「弘法大師」、「大師」と呼ばれて語り継がれているのも確かだ。

このように見ていくと、これらの伝説が発生した要因として、大きく分けて二つのことが見えてくる。ひとつは、信仰の裏付けとして宗教団体側から必要とされた超人的な力である。開祖である空海、弘法大師本人の価値、またそれに導かれた真言宗全体としての価値。これらを引き上げてより多くの信仰を集めるために、「入定」や「超人的伝説」という、信仰の対象になりうる要素を付け加えたと考えられる。

そしてもう一つが、都合の良い超越的存在としての仮託だ。水辺の伝説や、大師講の伝説に出てくる大師は、もともとその地にあつた産土神や山神のことであつた可能性が高い。それに元來名前があつたのはわからないが、おそらくそれには、明確な名が付いていなかったのではないか。そこに現れた「弘法大師」という超人的な存在。とくに「僧形のものが」という言い伝えを持っていた場所では、これほど都合の良い存在は無かつたのではなからうか。その存在に「弘法大師」という名を付けてしまつたのであろう。

また、真言宗の信徒であり、山岳地帯で厳しい修行をしつつ各地

を回るものを「高野聖」といった。かれらはその足で出向いた先で、宗祖である弘法大師のいかに素晴らしいかを熱弁したことだろう。もともと仲間意識の強いムラの中では「来訪者」「マレ人」というのは特別な扱いを受けるものであつた。ただでさえそうであるのに神聖な僧侶であり、超人的な宗祖の話をする。そのようにして、地域特有の神々と、高野聖と、弘法大師と、様々な姿が混ざり合つて、「弘法大師」が生まれたとも考えられるのである。

## 人と「神」

ここまで弘法大師の伝説を見てきて、弘法大師があまりに偉大な神のような存在になつていっているように感じないだろうか。そこで湧き上がってくる疑問が、「神とはなにか」というものだった。そこで、ひとまず神を定義付けるとともに、人は神に成り得るのかを考えていきたい。

日本はもともとアニミズムの国である。至る所に、信仰の対象となり得る物や現象が存在した。人間の力の及ばない範囲は全て、自分たち人間よりも上位の存在が行うこととして、それを畏怖し、祀り上げる文化が存在したのである。政府の働きかけもあり、それ以後から名前がつき、あらゆるものがそれぞれの名前に集約されていったことで、現在の神ができあがつた。しかし人々の宗教感情としては、名前が統一されたとしても、自分たちよりも「上」の存在を崇めることに変わりはない。そこに入つてこようとしたのが仏教だが、こちらは仏という存在を信仰するものである。それを民衆がどのように受け入れたかと言えば、やはり「上」の存在として受け入れたのであろう。神と仏というと、真つ先に思い浮かぶのは「神

仏習合」であろうが、それは人為的な働きである。ここで論じたいのは人々の宗教感情の中の神と仏であるので、一般的な「神仏習合」とは別のものとして捉えていく。

人々の中では天照大神も、仏も、自分たち人間の頭上を行く超人的な、「上」、カミの存在。そういう「上」の存在を「神」だということならば、仏も間違いなく「神」の一つだ。そのような「神」の一つとして、日本人は仏を受け入れたのだった。

ここでは、それぞれに神と仏が存在することを認めた上で、それらを統括して超人的な力を持ち、また信仰をあつめるものを「神」としたい。

このように考えると、弘法大師も「神」になったと考えられるが、そうであれば、もうひとつ考えたいのが、人が「神」になり得るのであればその要因がどこにあるのか、というところだ。

ある個人が死後に「神」となった例はいくつかある。例えば、菅原道真などは有名な話で、政敵の讒言によって大宰府に左遷され、その死後、京に様々な厄災が降りかかったため、祟りを恐れた醍醐天皇が鎮魂のために祀り上げた。現在の天神様である。

このタイプを、「御霊型」と名付けたい。まさしく「怨霊」から「御霊」となったタイプだ。その大半に共通するのが①不遇の最期を遂げていること。②当時の為政者にとって政敵であったこと。③死後、京や残された人々に何らかの災厄が降りかかること。この三つである。井上内親王・早良親王・佐倉惣五郎などもここに当てはまる。

それに対して「偉人型」と名付けたいのが、大きな功績を残した人物があつて「神」となったタイプである。例えば、後に日光東照宮に祀られる徳川家康などが当てはまるだろう。藤原鎌足・

源満仲・安倍晴明などもこれだ。そこには、①何らかの開祖であるか、強い力（武力や神通力など）を持っていること。②政治的に利用できる存在であること。これらが共通点として挙げられる。

特に偉人型においては、人々の憧憬や尊敬から信仰を集めることが多く、それゆえ政治的に利用される部分かなり大きい。ある団体の権威づけであったり、教訓的に都合よく取り上げられていたり、策略が垣間見える部分は無視できない。

しかしこうして御霊型、偉人型とみていくと、どちらにも共通するのはやはり、残された人々の意識に左右されるということだろう。死後しばらく経ってから人びとが「神に祀り上げなければならぬ」と判断した場合に、人は神として祀り上げられるようである。

そこで弘法大師においてはどうかであったかという点、見てわかる通り偉人型に当てはまるだろう。ここに抽出した要素に、彼はびつたりと当てはまる。まず真言宗という、日本二大密教というべき宗派の一方の開祖である。驚くべき手腕で、たった一代で真言宗を完成させた彼は、真言宗の象徴として十分な存在感があつた。弘法大師という大きな名を贈られ、付加価値をつけられ、りっぱに神格化されていくことになったのだ。

弘法大師に「神」となる要因があつたことは明らかだが、このように人が「神」となる思想を築き上げた原因も、彼の持ち込んだ密教の思想にある。古代の日本は、前述したアニミズム文化の中にあつて神と人との境界が曖昧であつた。そこに、人と仏の間には大きな隔たりのある仏教が伝来する。

そういった仏教の伝来によって、日本において神と人間は別離を

果たすはずだった。しかし、その境界を明確にしないままにしたのが空海の持ち込んだ思想だったのである。すなわち密教だ。密教の、すべてのものの中に阿弥陀如来がいるという考えは、空海が「即身仏」を語ったように人が簡単に仏に近付けるという考えにもつながる。このことが人間と神との互換性を高めることとなった。そういう互換性が人々の意識の中に根付いた結果、「人が神になる」ということが不自然に思われない宗教観が出来上がったのだ。

さらに密教は、インドや周辺諸国の神々をうまく引き込んだのを見ればわかるように、全ての神や仏を包括して広がっていく。そのため、仏と神の境も曖昧となっていった。空海はこの多神教の国に、多神教の一面を持つ密教を持ち込んだのである。既存の神を侵害せず、仏をすべりこませるのに成功した。それは人々の意識の根底に定着して、すでに引きはがせなくなってしまったのだ。その結果が、この、人と神の境も、神と仏の境もはやけて容易に乗り越えられしてしまう、日本人の宗教意識なのである。

このように、空海の伝えた密教というのは、人を「神」とする確かな手助けをしたのである。こういった要因もあり、結果的に空海は「神」へと祀り上げられていくことになった。

### 「神」になった空海

ここまで、空海・弘法大師・「神」と論じてきた。ひとまず、空海が弘法大師として、ここで定義する「神」となったことは、疑いようもない。人々は真言宗の一部ではなく「弘法大師」という存在を信仰したのである。ことわざにまでなるとおり、その信仰は民間に広く普及することとなった。「偉人型」の「神」で、ここ

まで民間の信仰を集めることは珍しい。では、その要因はどこにあるのか。これは、空海という人間の中にこそ見いだせるのである。

空海は、国の中心から末端に至るまで、見事にその心を掴み、存在感を多くの人の心に刻みつけた。その上で卓越した思想を持って真言宗を布教して、宗教観を育て上げたのだ。その過程で空海の能力の高さや力の強さを目にした民衆の数は計り知れず、その偉大さから、真言宗といえど空海という等式を成り立たせてしまった。

それが後になって、民間伝承を弘法大師と結びつけたり、真言宗の威光を示すために付加価値を纏わされたりして、弘法大師伝説が作り上げられることとなったのだ。その超人的な伝説が人々の口の上ると同じく進行して、弘法大師を祀り上げる働きが起こるようになった。こうして空海は弘法大師という「神」へと祀り上げられていったのだ。

### おわりに

彼が「神」となったのは、布教活動の過程とその思想にこそ理由があり、彼がそうなることを望んだかは別として、空海自身がその状況を作り上げたのだ。不完全ではあるが、今回、ここにその可能性を示した。

### 参考文献

- ・ 福永光司『空海 三教指帰ほか』（中央公論社 二〇〇三）
- ・ 梅原猛『空海の思想について』（講談社 一八六〇年）



- ・福永光司『世界の名著3 最澄 空海』(中央公論社 一九七七年)
- ・津田真一『大乘仏典(中国・日本篇)』十八 空海』(中央公論社 一九九三年)
- ・日野西真定『弘法大師信仰』(雄山閣出版 昭六三年)
- ・小沢浩『生き神の思想史―日本の近代化と民衆宗教―』(岩波書店 二〇一〇年)
- ・斎藤昭俊『弘法大師信仰の形成と伝説』(『説話文学研究 第二十号』昭六十年)
- ・『立命館史学 二十三』(立命館史学会 二〇〇二)
- ・『国文学 解釈と鑑賞 二〇〇一 五』(至文堂 二〇〇一年)
- ・小松和彦『神になった人びと①』(『淡交 第五四号』(淡交社 平成一二年)
- ・和歌森太郎『神と仏の間』(講談社 二〇〇七年)
- ・『密教大系 第五卷』(法蔵館 平成六年)
- ・『日本仏教史論集 弘法大師と真言宗』(吉川弘文館 昭和一九年)
- ・『日本仏教史Ⅰ 古代篇』(法蔵館 昭和四十二年)
- ・『日本文化総合年表』(岩波書店 一九九〇年)
- ・『宗教学辞典』(東京大学出版会 一九七三年)
- ・渡辺三男『嵯峨天皇と最澄・空海(上)』(『駒沢国文 第二六号』(一九九九年)
- ・渡辺三男『嵯峨天皇と最澄・空海(下)』(『駒沢国文 第二九号』(一九九二年)
- ・西本昌弘『嵯峨天皇の灌頂と空海』(『関西大学文学論集 第五十六卷第三号』(平成十九年一月)
- ・福田亮成『真言宗小事典』(法蔵館 一九八七年)
- ・笠原一男『日本宗教史Ⅰ 世界宗教史叢書十一』(山川出版社 一九七七年)

## 受贈雑誌(二)

- |                |                               |
|----------------|-------------------------------|
| 学芸国語国文学        | 東京学芸大学国語国文学会                  |
| 学習院大学国語国文学会誌   | 学習院大学国語国文学会                   |
| 学習院大学大学院日本語日文学 | 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日文学専攻       |
| 学燈             | 丸善                            |
| 金沢大学国語国文       | 金沢大学国語国文学会                    |
| かほよとり          | 武庫川女子大学大学院文学研究科・日本語日文学専攻院生研究会 |
| 岐阜聖徳学園大学国語国文学  | 岐阜聖徳学園大学国語国文学会                |
| 京都教育大学国文学会誌    | 京都教育大学国文学会                    |
| 京都大学国文学論叢      | 京都大学大学院文学研究科国語国文学研究室          |
| キリスト教文学研究      | 日本キリスト教文学会                    |
| 近畿大学日本語日文学     | 近畿大学文学部文学科日本文学専攻              |
| 金城日本語日文化       | 金城学院大学日本語日文化学会                |
| 近代             | 神戸大学「近代」発行会                   |
| クノノス           | 京都橘大学女性歴史文化研究所                |
| 群馬県立女子大学国文学研究  | 群馬県立女子大学国語国文学会                |